

編集後記

編集長(ダン シロウ)

マガジン編集の仕事が続いていると、春夏秋冬にいろんな場所で原稿を受け取ることになる。送信側にもいろいろ事情があって、そんな 60 本以上の連載を出先のあちこちで間違いなく受け取るだけでも煩雑だ。加えて、今夏は異常な暑さでばててしまわれた方も多く、休載の知らせが続いた。

長くやっているのでも要領は分かっている、初心者の戸惑いのようなことはないのだが、それでもこの手間だから、これを突然、もう誰かが替わってくれ！と言っても無理な話かもしれない。まあ実際にそんなことになったら、やれるようにやるだけのことであるのだが、本誌には強力な編集員が二名も揃っている。(これはなかなかの配備だ)。

日本社会の課題の一つが後継者不足、世代交代問題だという一般論は承知している。その上で、いつまでも現役を続けている者の言い訳をさせていただくなら、立場や権力(肩書付き)を占有するつもりはない。極力、私的で無権限であることを心がけている。

もともとそういうところがあったのだが、権限や権力を持った経験があまりない。社会から与えて貰えなかっただけかもしれないが、私には好都合だった。マガジンの編集長などまさに、そんな役割だ。高齢化社会で働き続ける棲み分けのポイントがここにあると思っている。

リタイア時期が来たら、一個人に戻って、自分の甲斐性で出来ることに取り組む。私的に生きるとは、趣味を享受するばかりの消費者になることではない。

いや私の場合、コレが趣味か？

(こんなことを書いていた編集会議の前日にコロナ陽性が発覚。昨日の高熱では、zoom 編集会議も無理だったなあと思う。世間に起きることは私にも起きることか。)

編集員(チバ アキオ)

ある昔ながらの「ドライブ・イン」に行った。もともと予定はなかった。ネットで、そこがおいしい！癒される！という記述が数回出てきたのを覚えていた。急遽、その地域でどこかで食事をするめぐり合わせが来たのである。そもそも「ドライブ・イン」は世代的にもなじみが薄い。マ

ニュアル化され、サービスとして確立しているところの方が気軽に入りやすく感じてしまう。

レンタカーを店の駐車場にとめる。駐車場は砂利。車を止める線もない。店に近づくと入り口横のガラスはひびが入り、テープで補強している。入り口の扉を開けると、大量の鉢にポトスが植えてあった。進むと冷氣遮断用のビニールが下がっていて、そこをくぐって、テーブルが並ぶ空間に入る。お店には常連さんと思われる方、二組。席に座るとお水を出してくれた。その人は中学生に見える。私服にエプロン。夏休みに祖母の店をお手伝いしている様子か。表情もはにかみながら、復唱もただどしく、初々しい。厨房には祖母と思われる方と祖母の娘さんが調理の様子(つまり、女性 3 世代で回しているのか)。祖父と思われるの方も店の片隅に座っていた。別のお客さんの子どもさんがトイレに行こうとすると、床に突っ伏していたマメシバがうしろをついていく。ワンちゃんはトイレ前を横切り、店の奥へ。店内にはテレビがあり、見ているような、みてないような。常連さんとお店の人も世間話に花が咲いている。

端的に言うならば、入ると「昭和」で止まった雰囲気。こうした景色がとても愛おしい。こうしたお店の魅力について、「昭和レトロ」をキーワードに話題に上ることも増えた。

ネットがない時代は、新しいことへの注目はゆるぎなかった。しかし、新しいことがすぐに手のひらのスマホにある時代となると過去のことへの距離も同様に手に届く環境になった。ある大学 2 回生の好きなタレントは「内田有紀」さんだという。内田有紀は私が若い頃のアイドルである。昔の若い姿も、今の時を重ねた姿もかっこいいというのだ。若さに魅力を感じるだけではない。もっと長い時間を含めて、惚れているのである。

先ほどのドライブ・インも時代を超えて「令和」でも継続し、支持を受けている。店内には、おそらく昭和から時を経過したものが随所にあった。その価値にも令和の世間から注目されながら、孫世代が手伝っていた。魅力がわかるお客も、とりあげる動画配信者もいる。いろんなあり方も、惚れ方(昔より深い?)もできるようになったのかもしれない。

こうした飲食店もマニュアル化、FC 化されたものが増えた。働いているのはアルバイトで、ユーザーとして適正なサービスを求めることにも慣れてしまった。

入り口横のガラスが割れて、店内に飼い犬が歩いて

いて、祖父が休憩をしているお店はある時期はナンセンスだったかもしれない。しかし、そこにある「時間」の価値がわかるようになったともいえるのだろうか。

「対人援助」に「時間」が必要なことは言うまでもない。また、新しいことが無条件で良かったりするほど、この領域は単純ではない。そうしたことも見せてきたのが対人援助学マガジンの50回以上の連載ではないか。書かれている内容はもちろん、著者人の在り方でもある。「時間の大切さ」はヒューマンサービスのメインストーリーングからははじかれつつある。この「時間の価値」を示し続けたいと願うのが私が編集部として活動し続けている原動力の1つでもある。目の前の人との時間は仕事だけではない、暮らしでもある。その余白を持つべき現場の話が今号もたくさん集まった。

編集員(オオタニ タカシ)

数年前に『こんなことができたらいいな…』と思っていたことのいくつか、思っていたのとは違う流れの中で結実しそうになってきた。当初の構想とはずいぶん違っけれど、結果的に流れの中でできたものの方が「無理なく」「より良い形で」「継続して」できそうな気配を感じるのが何とも面白い。

かねてから、団編集長が言っていた「セレンディピティ」のことを、少し自分事として実感できた気がする。セレンディピティとは「何かを探しているときに、別の何か価値のあるものを見つける」といったような、“予想外の幸運との巡り合わせ”を意味する言葉である。ただ、団編集長の話では、この「予想外の幸運」を単なる“運”と片づけない。絶対にこうなる、とは言えないけれど、そういう幸運や巡り合わせが起きそうな行動を能動的に重ねることは可能であり、逆に思いがけない不幸の中にもその可能性が高まる行動の積み重ねがある場合もある…という、主体的な問題として捉えるのである。例えるならば、芽が出るかどうか、どんな芽がでるかはわからないけれど、それでもいろいろな種を蒔いておくことがのちの実り(幸運)につながる…というようなイメージだろうか。仕事はもちろんうまくいく方がいいのだけれど、「狙い通りに」いくよりも、少しの偶然を含んで結実する方が面白いと感じられるのはなぜだろうか。

対人援助学マガジン

通巻54号

第14巻 第2号

2023年9月15日発行

<http://humanservices.jp/>

■ご意見・ご感想■

マガジンに対するご意見ご感想は

danufufu@osk.3web.ne.jp

マガジン編集部

第55号は2023年12月15日

発刊の予定です。

原稿締切2023年11月25日！

執筆者、常に募集

本誌は常に書き手に門戸を開いています。新たなジャンルからの、執筆者の登場に期待します。自身の生活スケジュールに本誌「連載」を持ち、継続的に、自分だからこそ描ける分野の記録を発信したいという方からのエントリーを待っています。ページ制限なしの連載誌です。必要な回数、心置きなく書いていただけます。ご希望の方、編集長まで執筆企画をお知らせ下さい。執筆資格は学会員であること。現在非会員で書いていただく事になった方には、本誌は学会ニュースレターの位置づけですので、対人援助学会への入会をお願いしています。

対人援助学会事務局

540-0021

大阪市中央区大手通2-4-1

リファレンス内

TEL&FAX学会専用 06-6910-0103

表紙の言葉

これはヒトコマ漫画である。蛇足であることは承知で、その解説をしておく。

*

母と息子がマンションの隣室の扉前を通った。「アラ、お隣さん、海外旅行にでも行ってるのかしら？」と母は思った。(口にはしない)。息子は「スゲー、あんないっぱい溜まって！」(と、思った)。双方、口には出さないから、お互いは分からないギャップだ。だからどこにも笑いは生まれない。

多分、世間はこんな知り得ぬギャップに溢れているのだろう。

(2023/09/15)